

演 講

論 理 的 思 考

広島大学教授・文学博士

藤 原 与 一 (文責 編集部)

— 国語教育のために —

備考 — これは、昭和三十八年十一月九日、広大付小講堂

で行われた初等教育国語科全国語協会のときの

御講演を編集部で記録したものであります。

論理的思考っていろいろのはどういうものだろうか、というところからお話を始めましょう。

いちばんに、論理的思考というのは論理的に考えるということでございます。ここでは、論理性の尊重ということを中心として、論理的思考と申す。

二ばんに、筋目正しく考えるということが論理的思考だと思っております。筋目正しくということを中心として、論理的思考と申す。

三ばんに、また新たな説明をいたしますと、物事にみな過程を見出し、過程といえはプロセス、あの過程を見出し、その過程を秩序正しく追っていくということが、論理的思考だと思っております。

説明の第四番目に、論理的思考というのは物を生み出す考え方でなくてはならない、言い換えれば、生産的な思考でなくてはならない、と申したいのであります。これは、他のことばで申しますと掘り下げるといふようなことでございます。ぐんぐんと掘り下げないように考えていくことが、論理的思考だと思っております。掘り下げなければ論理的に考えたことにはならない、と申したのであります。私共が原稿用紙に文章を書きます場合にも、それを二へんから三へん四へん五へんと書き改めて参ります。その書き改めによって発表意見というものが深まって参ります。これは掘り下げということであり、論理的思考ということでございます。

論理的思考というのは、作り出す、いわば創造の思考でなくてはならないし開拓の思考でなくてはならないと思っております。

ます。従って、ここで論理的思考ということばを創造的思惟、ものを作り出す思惟といかえることができます。何を作り出すのか、広く申して文化であります。そうしますと文化生産の思考という物が創造的思惟であり、論理的思考であるということになって参ります。

さて、国語教育のためにこの論理的思考を問題にいたしますとき、私共としては、この問題を二つの方向に分けて考えることができると思います。どういう二つの方向かと申しますと、ひとつには、先生方が国語教育を研究するために論理的思考を重んじなければならぬ、という場合の論理的思考であります。いわば、国語教育研究における論理的思考というのがひとつの問題の方向であります。今ひとつの問題の方向は、国語教育を教室で実践していくとき、それを論理的思考によって実践していく、という意味での論理的思考、いわば教育実践そのことに関する論理的思考という問題の方向であります。

で、私は今、この席でその二つの方向のひとつを選びます。どちらのひとつを選ぶかはもうきうまで考えあぐねました。つまるところ、教師の研究の方向についての論理的思考の問題を考える、ということに落ちついたのでございます。そのことが、今日の席にふさわしいのではないかと考えたわけでございます。

そうしましたら、大きな見出しを改めまして、国語教育論の現状としていただきます。国語教育論の現在状況、みなさんのお仕事では、国語教育思潮の再検討ということになっております。

今日の段階でみますのに、広く申しまして、教師の国語教育研究は厚い壁にぶつかっていると私は考えます。似たりよったりの実践報告は山をなすほどであり、また、例えば読解指導の研究というような分野にいたしましたも、さまざまの研究題目が山をなすほどであります。それでいて、国語教育の研究は、必ずしもグイグイとは深められてはいないといううらみがある。と私は解釈いたします。

これをひっくりかえして申しますと、国語教育論の理論の流れというものは、浅い流れかも知れない、というような解釈であります。卑近な言い方をいたしますと、みんなある一線で踏み止まっているというおもむきであります。それを最初に「壁」と表現いたしました。

このごろ、例えば作曲家なら作曲家の流行児をひとり取りあげてみましても、例えば中村八大というような人があります。その人はユニークな手法で斬新な曲を発表するということが、私共の目をみはらせるようなところがあります。いわば、ヒット

曲というものを次々に発表して参ります。しかし、最近の作品に接しますと、私共はやっぱりこりゃ中村さんの粹だな、ということを考えさせられるのであります。

あるいは作家の井上靖という人が次々に女性を描いて参りましたが、もう私共は井上靖氏が女性を描くと、ああ、あれだと納得するほどであります。

で、人間の努力というものは誰しもやはりこういうような型を作っていくものであり、広く申しますればかべにぶつかっていく宿命をもっていると考えるのであります。そういう点では、今日の国語教育論の現状に対して私共は正しい同情をもたなくてはなりませんけれども一方、我が身のこととして考えました場合には、その壁を越えていく努力を思わざるを得ないのであります。他のことばで申しますと、国語教育の重厚性、これをうちだすことを私共は目下の課題と思ふのであります。

それには論理的思考の力を強くすることが根本的に重要ではないか、というのが、今日の私の提案でございます。創造的思惟ということを考え、創造的思惟を發揮する事を考えることなくしては、今日のかべは破れないというようなつもりでございます。国語教育研究の内面化、内面化あるいは深化、ふかめていく、内面化あるいは深化の扉は論理的思考の鍵で開くことができると思ふのであります。

あるいはみなさん、反論なさるかも知れません。ずい分論理的に考えているじゃないか、こういう反論に対しては、私は簡単な実例でお答えいたしたのであります。例えば、指導要領の文章をごらん下さい。残念ながら現在の指導要領の文章は、論理的思考を自覚する以前の文章であります。指導要領一冊を前に置いても、私共は、お互論理的思考力を高めようじゃないか。高めることによって、国語教育論の重厚性をうち出さなくてはならないと申さざるを得ないのであります。で、こういう共同の席では、正に教師の論理的思考力を高めることについて共同研究することが有意義である、と申したのであります。

二

それではどのようにして論理的思考の力を強めていくか、あるいは創造的思惟の能力を身につけていくか、そのことを御一

緒に考えたいと思うのでございます。

私共の日常の思考の生活、これを考えてみますと実に目の粗いものでございます。その目の粗さは、私共の乱雑な言語生活の上にあらわでございませう。この日常の、目のあらい思考生活というものを克服していくということが、論理的思考の生活に依っていくということではございませう。

私共の努めるべきことは、これで明らかにいたしました。どのようにして論理的思考の力を強めていくか、私の考えます手段・方法を申しのべて、みなさんの御批判をおおいで参ります。

一番に、物事の正に対して反を設け、正に対して反を設け合を生んでいく、正反合でございませう。正に対して反を設け然るのち合を生んでいくというような営みをすれば、まさに論理的思考の力を強めていくことができる、とまず申しあげます。

ところで、正に対して反を設けるということはやさしいことではございませう。その正と反との対立から合を生み出していくというのは、これは大変な仕事であります。そこで考えられますことは、合を生み出す共同研究ということでございませう。私は、現場の中での共同研究というのをみなさんの合言葉にさせていただきたいと、かねて存じておるものでございませう。

ところで、その共同研究のやり方でございませう。材料集めの共同動作もございませう。が、もっとも値うちのある共同研究は、正と反との対立からむずかしい合を生みだしてくるということにあるかと思っております。これは、ずい分みんなが頭をしぼりあわなければできないことではございませうから、まさに共同動作の施しどころと申すべしと申すのでございませう。

それには、まず、私共個人個人の体験を強くしていくことが論理的思考力を強める道ではないか、こう思うのでございませう。個人の体験の強さというものが論理的思考力を發揮する強い契機になると、そう申したいのでございませう。この際、体験というものは国語教育体験に限らなくてもいいと存じます。で、卑近な言い方をいたしますれば、坐って考えるよりも、進んで行動するということ、坐って考えるよりも進んで行動することによって得られるものを求めていく、そして求められるものは体験だと言えるかと思っております。

だんだん話をくだいて参ります。

自分のトクイなものを静かに発見するということが、論理的思考の力を強めていくもとはなにはなりはしないか、言いかえれば、物事を掘り下げて考えていく力のもとになりはしないか、こういうことではございませう。個人の体験を強くするというよう

な言い方をいたしますと、やや、むずかしいように感じとられるかも知れません。それを三番目のように言い換えます。自分のトクイなものを静かに発見する。ここで、トクイという漢字に御注意下さい。アノ、おれは三段跳びが得意だという得意という字ではなく、特別に異なる、という特異であります。

自分の特異なものを発見してそれを推進しますと、推し進めますという、クリエティヴな研究になります。創造的な研究になります。私共の平素の研究生活は全くこれだ、いつも思うのでございます。そこで日常、私は学生諸君にイケンを求めるときにも、イケンを言って下さい、というときのイは異なるの異を用いるわけです。なるべく変わったことを言って下さい、というようなことでございます。各人に、その特異なものを発見させるということが、その研究生活を深めていくことになる事実を毎度経験しております。で、特異なものの発見が生産的思考につながっていくと申したいのでございます。特異なものの発見が創造的思惟の道となると、申したいのでございます。そういたしますと、もう、特異なものを発見したら、既に論理的思考の実現というところにさしかかった、と考えてもいいのでございます。

ここで、一般的なことをつけ加えますれば、人は自己の特異なものによって最も普遍的な貢献をすることができるといふことでございます。私共が普遍的な貢献をしようとすれば、自己の特異なものに根ざすより他はない、というようなことでもできようかと存じます。

一芸に秀でること、これが生産的思考をものにするものだと申したいのでございます。

一芸と申せば、例えば版画の棟方志功さんを思い起こして下さい。版画と共に生きていく棟方志功さんが、時にラジオなどでおっしゃるその一言葉一言葉、そりゃあもう、まったく開拓力の強い、創造性の強い、堀り下げてやまないことばであります。つまり一芸に秀でた棟方志功さんは、十分に論理的思考の力を発揮していらっしゃいます。すぐれた実例でございます。

さて、そのような一芸は、例えば私にとっては高い山の花でございますから、一芸ということばを一芸一道と言ひ換えます。一芸または一道でございます。

そのひとつの道ということばをもうひとつ言い換えまして、ひとつのよりどころと申します。明確なよりどころ、まさに明確なひとつのよりどころを持つということが、論理的思考力を発揮するものだと思うのであります。

みなさんの国語教育の御研究にひきあててお聞き取り下さい。

私は単純な実例を出してみます。おとなの作文の力をどのようにして増強するか、強めるかというときに、私は、次のような実験をよくやります。例えば、たった一語の作文をやるわけです。おとなは大体作文と申しますと、原稿用紙二枚も書こうかと思って構えているわけですね。それに対して、一語作文というのを徹底的にやる。そうしますと、一語に笑うものは一語に泣くということをよく実感いたしましたして、一語作文が実は作文力の根本を培うということになって参ります。ひとつのよりどころとして、一語作文をやるということの実義を申しあげてみました。

このようにして、何事にも私共は、ひとつのよりどころで対処する、これが論理的思考力を發揮するもとだといっているのでございます。

これを、また言い換えます。自己の明確なよりどころを、専門センスと言ひ換えます。専門の学問と申しますとよろしくはないでしょうか。専門センス、専門感覚と申したいのでございます。かつては、新戸稻三先生がお使いになったことばだと承わっております。

専門センスだとか、あるいは自己の明確なよりどころだとかいうものは、最も人間的なものでございましょう。従って、最前のことば、個人個人の体験を強くすればということとながって参るのでございます。

この専門センスということばをもいっぺん言い換えます。本質的教養と言ひ換えます。

ひとつのよりどころというものは、自分にとっては本質的な教養である、こう考えていいと思うのであります。特異なものを持てば、私共は普遍的な貢献ができることさき申しました。ひとつのよりどころがこの普遍的貢献の原動力であると言うならば、私共は、このよりどころまたは専門センスを、本質的教養と呼んでいいと思うのでございます。

これでことばが難しくなりましたから、もう一度言い換えます。一所一角。一所一角を持てば、私共は論理的思考の力をだんだん身につけてくることができるのではないか、こういう論でございませう。

さて、一所はひとところですけれどもイッシュに通ずる。一所は一書に通ずる。こういって、私共は、論理的思考力を強めるために一書を持つ、言うところまで話は迫って参りました。

言い換えますれば、自分が傾倒してやまない一書を持つことに努めるといふことでございます。なかなか持てなくても、傾倒してやまないような、傾倒してやむことができないような一書を持つとうと努め始めましたら、もうその努めが既に論理的思

考じゃないでしょうか。堀り下げていく働きになっているのじゃないでしょうか。一書を精読するとは、一書を強く読むことでございます。

ここで、イギリスから来ましたブランドン氏のことを引用いたしますと、何かに書いてございました。日本人は読書病にかかっているのじゃないか、書物を読む病気にかかっているのではないか——ブランドン氏の提起であります。これは、裏返して申しますというと、日本人は考える力を失っていやしくないか、ということだと紹介されています。

浅い多読というものが、わが国語教育論の世界にもまた、数を増してはいないでしょうか。その点について立ち入って申し上げてみます。ことばの足りない点は、許していただきとう存じます。

特に、例えば指導主事さんというような立場の人、指導主事さんと申しあげてはいません、指導主事さんという立場の人の現状を見ますというと、多くのものを浅く読んで通るように習慣づけられていると思うのでございます。そこには、論理的思考の営みの糸口がない。また、教育研究所の所員というような立場の人々、やはり似たような傾向があり、または、付属小・中学校というような立場の方々、これまた似たような傾向。で、申すまでもなく、私共のように国語教育の話させられる立場のもの、また似たような傾向にあって、慚愧にたえないのであります。

仮に四通りの立場をあげましたが、これらの立場を連れねて病気の名前を探求してみますれば、コレモ知ッテイルという病気であります。ソレハ知ラナイとなかなか言えない病気であります。病名をまた申しますれば、一言応答せずにはおかないという病気であります。また病名を改めてみますならば、ソレニモ一意見、このイケンは通常の意見であります。ソレニモ一意見がアルという病気であります。

で、私自身そういう病気にとり憑かれて、さっき以来申しましたように、自分の研究が厚い壁にぶっかかっているという自覚をうち消すことができないのであります。したがって私の個人的な苦悩を申しますならば、自分が何かを開拓したと自覚し得るときでなくっては、こういうような席には出ることができないという、そういうつもりでございませぬ。

で、先に申しますような病気でございませぬと、思考力は浅く流れる他はございませぬ。で、論理的思考のためには、ひとつに強く執着する。

優れた芸術家の例を上げますれ、例えば坂本繁次郎画伯は、馬の絵というものにずっと執着し、あるいは梅原竜三郎画伯

は、富士山を画き北京を画いて、それに執着しています。

ひとつに執着するということは、内面化、あるいは文化推進ということになります。このような執着から、本当に有力な教育論を生み出すことを、お互に考えようではございませんか。

三

つぎに考える構想は、文化に関する学者のものを読むということでございます。これは、論理的思考の訓練に大いに役立つだろうと考えております。

早く実例をあげますと、例えば阿部次郎先生の「三太郎の日記」を読むとか、西田幾太郎先生の、他ならぬ「青春日記」難しい哲学書をさておきまして「青春日記」を読むとか、柳田国男先生の随筆を読むとかでございます。また、和辻哲郎先生の随筆を読むとか、このように文化に関する第一級の学者の意見というものを読むことは、私共の論理的思考の訓練に大いに役立つと考えます。そのようなものを読むことによって、私共は、心の位というもの、心位というものを高めていくことができます。心位が高められれば、その段階でものを考えますから、論理的思考力というものはだんだんに発展して参ると論ずることができます。

で、そのような、優れた学者の業績に接するひとつのおもしろい方法を御紹介いたします。それは、最近のようにまとまった全集が出ますと、よく内容見本というものがついて参ります。全集を読むことはさておいても、あの内容見本は是非御愛読になることをお勧めいたします。これが私共の論理的思考力をどれだけあげましてくれるか、はかり知れないものがあると強調したいのでございます。

つぎは、聞く、話しをきくの聞くでございます。聞く人格の練成というところでございます。聞く人格を練成することが、自己の論理的思考力を強めるものになると申したのでございます。早い話が、始めから人の話を聞こうとはしない人がありますね。それでは、論理的思考などは発展のしようがございません。聞く人格というようなことは、使いながらドキッとするのであります。私自身、聞くことに於ては、非常に低い段階にしかないということを思うからであります。

先だって得た、端的な実例を御紹介しましょう。同期生という二人の卒業生がいます。その二人の卒業生、共に、勉強熱心

であります。私は、今日の席に出ることを予定しておりましたから、その二人を次のように考えてみました。聞く、聞く二人、聞く二人として考えてみました。そうしますと、確かにその二人は、聞く人格としては違った人格なのです。一方のほうは聞いては聞き入れ、聞いては聞き入れ、まあ、聞き入れ型の聞く人格なのです。片一方は、よく聞いているんですが、つっぱり型の聞く人格。実に顕著な対称なのです。負けずおとらずの勉強家でもあります。さて聞く人格という吟味になりますという、一方は聞き入れ型の聞く人格、一方は、つっぱり型の聞く人格。これを他のことばで申しますという、聞くことの柔軟性に於て、甲乙の差があるということでございます。

さて、どちらが伸びるだろうか、私共の興味深いところでございます。長い将来を考えました場合に、どちらが早く大きなものをつかむのか。つっぱり型の人格は、比較的早く壁をやぶることの難しい段階に到達するのではないかと思われるのでございます。例えはそれだけでございます。

ここで、ひとつの抵抗は、子供に聞けるということでございます。先生方は子供にお教えられる。子供に聞くという生活は、先生方の御日常で一体何パーセントでしょうか。

要するに、聞くの練成から、論理的思考の道を開いていこうというのが、私の主旨でございます。

つぎは、表現のことはをひとつひとつ苦勞して使っていくということ。表現のことはひとつひとつ苦勞するということ、自己の論理的思考力を強めることになる。ということでございます。

悪い実例を申しあげてみましょう。私が目医者にいきまして、どうしてこんなに目やにが出るんでしょうか。こういう風にお伺いしてみますという、お医者さんが、やっぱり分泌物が出るんですね。これで答えになったのでしょうか。(笑) こういう風な生活を体験することなくしては、論理的思考力というものは身につけることができません。

先生方が、絵日記に批評をつけます、「毎日熱心に、大変美しく、丁寧に書いています。」と、こうおっしゃる。「毎日熱心に大変美しく丁寧に書いています。」どこに力を入れているのか、不可解なことばであります。

学生の「ことば、進路はどのくらい進んでいるかと申しますと。」

これは、教授会の中で聞いた論述であります。「そういう、非常にこの、どういふことがあるのか。」少しも解らない。(笑) だから、まあ教授会としても、積極的にも消極的にも肯定も否定もしたくない。

芥川賞の候補の作品を読んだ時のことかと思えます。「候補作の諸子よりも、自分の方が今後の試みの匂いが弱い」とは、まことに稀にしかないのである。」お解りになったでしょうか。次にいって、「しかし、もしそうだったらこんなことになったのじゃあるまいか、ということ、想像できないこともないのである。」(笑)しかし、今こう申した文章の書述は、実に文章の立派な書物だとして、一応世に通った書物なのです。一文一文が完結した思想性というものを持っていないのですね。

ここで、私共は、日本語に問う心を持ちましょうと考えなくてはなりません。言語は思考のための言語であると言うことができます。そうすれば、論理的思考のためには、日本語に問うということを、ここで考えなくてはならないと思うのでございます。

それでは、最後に結びのことばを申しあげます。

以上のような意味に於ては、私共は国語教育研究のためにひとつの出直しをやらなくてはならないのではないかと、また他のことばで言いなおしますと、私共が国語教育論をいたします場合に、大きなことを言おうとはせず、気のきいたようなことを言おうとはしないということ、言い換えれば実直を尊ぶということが今日大切なのではないのか。他のことばで申しますと、いと、国語教育論の謙虚ということが必要であると考えるのでございます。平たい言い方をいたしますれば、国語教育論の世界はザワザワとした世界でないか、だとすれば、これを静かな国語教育論の世界にしなくてはならないということであります。

その要求に対して、方法はあります。私に言わせますならば、論理的思考という柱にとりまがかることとございます。あるいは、論理的思考の柱をがっしり抱くということとございます。自己の発達の可能性というものはここにある、ということが考えられます。言換えますならば、論理的思考というようなことを教師自身の問題とすることによって、自己の発達の可能性を信じよう、お互に信じようということとございます。

申し足りませんけれども、以上でひとまず私のお話を終ります。(拍手)